



エレミヤは **ベニヤミンの地のアナトの祭司ヒルキヤの子であった(1:1)** と記されています。アナトはエルサレムの北東5キロにあるベニヤミン族の嗣業の地で、古代の宗教的中心地、ベテル、ミツパなどの近くにありました。ベニヤミン族は使徒パウロが **わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。(フィリピ3:5)** と自己紹介する言葉に見られるように、誇り高い部族でしょう。父は神殿の祭司ではなく、地方の祭司でした。

ヨシヤ王の治世13年に、エレミヤは10代後半で召命を受け、預言活動を始めました。その時代にはアッシリアの勢力は弱まり、ヨシヤ王は奪われた北イスラエルの首都サマリアの地方を取り戻しているようです。エレミヤは北イスラエルの滅亡の原因となった不信仰について預言を始めています。

最初に、民の罪として2つの悪、**生ける水の源である私を捨てて無用の水溜めを掘った(2:13)**と咎めます。サマリアの預言者たちは **バアルによって預言し、わが民イスラエルを迷わせた(23:13)** と記しています。**北イスラエルを背信の女**と呼び、悔い改めを求めています。同時に**エルサレムをも裏切の女**と呼び、その墮落を糾弾し、特に預言者と祭司を、**利をむさぼる者、欺く者**と呼び、**我が民の破滅を手軽に治療して 平和がないのに「平和、平和」と言う(6:14)** と糾弾します。バビロンの脅威が忍び込んできているのをエレミヤは感じるのです。さらに、ヨシヤ王が回復した過越祭に関しても、**あなたたちの焼き尽くす献げ物を喜ばず／いけにえをわたしは好まない(6:20)** と批判しています。民が困窮している最中に、盛大な祭りを行う意味をエレミヤは見出せません。

やがてエレミヤは神殿の門で預言を始めました。**主の神殿、主の神殿、主の神殿(7:4)**と、ヨシヤ王の宗教改革のスローガンが叫ばれていても **神殿は強盗の巢窟(6:20)** となったと言います。民族の出発点であった**アブラハムとの契約**である主の声に聞き従うならば、神の民となると説きます。

この時、「預言を止めよ、さもなくば命はない」と郷里アナトの人々の陰謀があったことを知らされるのです。兄弟や父の家の人々でさえ、背後で徒党を組み、エレミヤを欺こうとしていることを知り、エレミヤは嘆き、郷里を離れ、ユーフラテスへと行き、そこでエレミヤは神に「帯」を締め直すようにと示されます。事をなすとき、バプテスマのヨハネは革の帯、使徒パウロは **悪と戦う時は立って、真理を帯として腰に締め(エフェソ6:13)** とありますが、帯を締め治して、預言するように促されます。

エレミヤは **あなたはこのところで妻をめとってはならない。息子や娘を得てはならない(16:1)** と、独身で生涯を送れとの神の声を聞きます。また、葬儀、酒宴など飲み食いの席につくなくとも言われます。預言を聞いてもらえず、排除される孤独の中で、エレミヤは神に、預言を語る苦しさを率直に訴えます。神は**わたしがあなたと共にいて助け、あなたを救い出す(15:20)**と約束します。

エレミヤは悔い改めなかった民は神の裁きを受け、アッシリアに追放されたのは当然ではあっても、同時に神の導きも必ずあり、故国に導かれると信じ、**新しい出エジプト**が与えられると預言します。見よ、このような日が来る、と主は言われる。人々はもう、「**イスラエルの人々をエジプトから導き上られた主は生きておられる**」と言わず、「**イスラエルの子らを、北の国、彼らが追いやられた国々から導き上られた主は生きておられる**」言うようになる。わたしは彼らを、わたしがその先祖に与えた土地に帰らせる。(16:14)

ヨシヤ王が戦死し、ヨアハズ王もエジプトで殺され、エジプトの傀儡王となった異母兄弟ヨヤキムに、エレミヤは**不当な利益を追い求め、無実の人の地を流し、虐げと圧制を行っている(22:17)** と糾弾し、正義と恵みの業を行い、搾取されている者、寄留の外国人、孤児、寡婦を救えと訴えます。預言者たちは「安泰、無事だ」と声を揃え、神の言葉ではなく、自分の心の幻を語る、偽りの預言者だと言います。創造主なる神は、陶工が出来な壺を砕くように、民と都を砕かれると預言します。